

それぞれの主張を終えて



講評

上野小学校
渡邊 伴子 校長

「心豊かな大人になることを願って」

今年の大会も、本当に素晴らしい発表でした。小中学生のみなさんが自分の考えを持って行動を起こそうとしていることに感銘を受けました。

特に今年はテーマが豊かで、学校での取り組みから自分の責任について考えたことや、学習したことから自分の考えを言ったもの、身近な体験からテーマを拾ったもの、自分自身を見つめて考えたものなど、すべて自分自身から出発して、考えを深め、また自分

自身に戻って行動を起こそうとしているところが特徴的でした。また、8人とも表現豊かで、伝えたいことに力をこめ、自分の感情を言葉に乗せた、堂々とした発表でした。

みなさんの今のすてきな気持ちや是非これからも持って欲しいと願っています。そしてしっかりと自分の頭で考え、書くことを大事にして心を豊かにして欲しいと思います。

今回発表されたみなさんがすてきな大人になることを願って、心からの拍手を送ります。

最優秀賞：蔣野 あかりさん

受賞のコメント

「壇上ではとても緊張しましたが、想いが伝わったようでうれしかったです。田川地区大会でも緊張すると思いますが、堂々と主張したいです」



↑ 今回の大会で最優秀賞を受賞した蔣野あかりさんは、福智町代表として、2月8日(土)に赤村住民センター大ホールで行われる田川地区大会に出場し、主張を発表します。



赤池中2年
浦田 芽依 さん

「差別」や「偏見」のない世界へ

主な内容

私の母方の祖父母は耳が聞こえないので、会話をするときにはいつも手話で会話をします。小さいときは、周りから偏見の目で見られるので、手話を使うことが恥ずかしいと思いましたが、今は手話で会話することに誇りをもっています。今、世界では人種差別など「差別」が大きな問題となっています。そして日本でも「障がい者への差別や偏見」「在日外国人への差別や偏見」など、たくさんの「差別や偏見」が存在し、今なお厳しい現状が続いています。この「差別」や「偏見」を少しでもなくしていくことが、今を生きる私たちの「宿題」ではないでしょうか。健常者の私たちにも、障がい者の人たちにも、誰からも侵されることがなく、人が生まれながらに持っている「人権」があります。しかし、なぜその「権利」を「差別」や「偏見」で侵されるのでしょうか。もし、自分が不慮の事故で健常者から障がい者になってしまった時、差別や偏見を受けたら、あなたはどんな気持ちになりますか。「自分がされて嫌なことは他人にもしない」という当たり前のことを決して忘れてはならないと思います。どのような理由であれ、人が人を差別することは許されることではありません。数え切れない様々な差別や偏見を無くしていくことは、現代を生きる私たちへの大きな課題です。私は、まずは身の回りの小さないじめや喧嘩を無くしていき、最後は世界中から「差別」や「偏見」がなくなるように訴え続けていきたいと思っています。



方城中2年
蔣野 あかり さん

「障がい」について向き合って

主な内容

私はこの夏休み、障がいについてお二人の話を伺う機会に恵まれました。一人目はさやのりこさん。両手足が麻痺する脊髄の難病と闘いながら抽象画を描いている画家のかたです。私がさやさんの話から学んだことは、目に見えない何かの力に感謝することです。「手足は意識して動かしますが、心臓などの臓器は意識しなくても動き、命を支えてくれている」。この言葉は難病と闘ってきたさやさんだからこそ出てきたものに違いありません。私も、当たり前のことに対する感謝を忘れずに生きていきたいと思いました。もう一人は飯塚国際車いすテニス大会会長の前田さんです。車いすテニスに挑戦する選手を見て前田さんが言った「人間に不可能はないと思った」という言葉が心に残りました。障がいについて学んで、私の考えも大きく変わりました。例えば、車いすに乗っている人と自分との違いは、車いすに乗っているかいないかだけだと思うようになりました。また、障がいと改めて向き合ってみて、すごく身近なものだと感じました。そして、障がいをもっていても「今の自分」にできることを考え、努力するみなさんの姿を見て、やる気があれば何でもできるのだと勇気づけられ、自分も自信をもって頑張ろうと思いました。それから、たくさんの当たり前のことへの感謝の気持ちも大事にしていきたいです。今回、障がいについて考え学ぶことができた経験を忘れずに、これからも自信をもってさまざまなことに挑戦していこうと思います。



金田中2年
植高 昭 さん

大人への階段を登る僕

主な内容

生徒会学習部長・吹奏楽部員。これが今の僕の肩書きであり、授業中は常に真面目で、先生からは「昭くんは天使のような子やね」と言われます。これが学校での姿です。しかし僕には、大人への階段を手探り状態で登っている、反抗期という暗闇にもがいているもう一人の僕がいます。僕は今、反抗期真っ盛りです。親のことを嫌ったり反抗したりなど、これまでは考えられなかったことが起こっています。でも僕はそんな自分が好きです。なぜなら、反抗期があってこそ、親をもっと愛せるようになると思っているからです。反抗期を実感したのは六年の頃からです。なんだか急に親の言うことやすることが嫌になり、頼ることも嫌になりました。本格的になったのは中学生になってからです。親に暴言を吐いて抵抗するなど、行動に表すようになりました。学校では絶対に見せない姿を家でさらけだせるのは、相手が親だからという甘えだし、自分を受けとめてくれるのを知った上での行動なのです。基本的には親が大好きな僕は、「なぜあんなことをしたんだろう」など、自問自答する日が続いています。僕の兄弟たちがいつかそんな時期に入ったらこう言ってあげたいです。「その時期は絶対避けられない大人への階段だ。それを乗り越えたら立派な大人だ」。今、立ち向かっている反抗期は、大人への階段の大切なステップです。責任をしっかりと果たせる大人になるためにも、焦らず、後悔せずに、今を乗り越えてみせます。



上野小6年
安永 麻未 さん

私が考える 明るい未来

主な内容

最近、小学生の連れ去り事件、監禁事件と小学生が狙われるニュースをよく聞くようになりました。そのニュースを聞くたび、私は背筋がぞっとします。そんな不安を取り除いてくれるのが「きずな会」です。私たちの登下校を雨の日も、風が強い日も黄色いベストを着て、いつも見守ってくれています。きずな会のおじさんが、「黄色のベストは、あなたたちを守りますという意味だよ」と、笑顔で教えてくれました。私はそれを聞いたとき、「私たちは一人じゃない。地域の人たちが守ってくれている!」と、うれしさが胸がいっぱいになりました。また、福智町には、地域だけではなく、他の国の人たちともつながる取り組みがあります。それは、韓国の子もたちとの日韓交流です。韓国の友達とは、まだうまく話せませんが、身振り手振りや通訳の本を見ながら話しかけると、会話が少しできるようになりました。言いたいことが伝わったときは心がつながったようで、とても嬉しいです。社会を明るくするために、何が一番大切かを考えてみると、「人とのつながり」が大切だと思いました。地域のつながり、国同士のつながり。困ったときは助け合い、仲良くすれば、そのつながりがだんだん広がって、平和で明るい社会が作られるはず。私の社会は、まだとても狭いですが、これからもいろいろな人との出会いを大切に、いろいろなことに前向きに取り組んでいきたいと思っています。

※各発表者の文章は原文のままではなく、主張の主な内容を要約して掲載していますのでご了承ください。